

日本語と中国語の受動文に見られる類似点と相違点

著者	王 亜新
著者別名	WANG Yaxin
雑誌名	東洋大学人間科学総合研究所紀要
号	18
ページ	41-63
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008019/

日本語と中国語の受動文に見られる類似点と相違点

王 亜新*

0. はじめに

本稿は、日本語と中国語の受動文における「受影」と「受動」のあり方について考察を行う。紙幅の都合で両言語の受動表現の全体像を捉えるのが難しいので、主として日本語の「受影受動文」と中国語の「“被”構文」に限定して、両者の類似点と相違点を分析してみる。

本稿で取り上げる日本語の「受影受動文」(affective passive)は、益岡隆志(1982: 50-52)に従い、主として主語名詞句が「ある出来事の結果として心理的或いは物理的影響を被った」という意味関係を表す受動文を指す。これは松下大三郎(1930)以降指摘されてきた「利害の被動」や「迷惑の受身」などとほぼ重なっている。「受影受動文」のほかに、「単純の被動(松下大三郎 1930)」を表す「中立受動文」も存在するが、主として「直接受動(物理的受動)」を表し、「利害」などの心理的影響を伴わない点で「受影受動文」と異なっている。

一方、中国語の受動文は、「被、叫、让」などの標識を伴う受動文のほか、形態を伴わない「意味的受動文(语义被动句)」と、受動動詞による「受動動詞文(被动动词句)」¹も存在する。本稿では、主として“被、叫、让”などを伴う受動文を扱うが、叙述の便宜上、一括して「被構文」と呼ぶことにする。

1. 先行研究

日本語の受動文は、英語と違って複数の構文バリエーションを持っていることで知られている。英語などでは主に行為の直接対象を主語にして受動文が構成されるが、日本語では直接対象のほか、対象の持ち主、動作の相手および第三者の行為によって影響を受けたものも主語に受動文が構成されている。

* 人間科学総合研究所研究員・東洋大学社会学部

¹ 「意味的受動文」とは“衣服洗好了(服はきれいに洗った)。”のように意味的には受動を表しているが、形態的には目的語前置の動詞文を指す。一方、「受動動詞文」とは“他挨打了(彼は殴られた)。”のように“挨”などの受動動詞を伴う動詞文を指す。

鈴木重幸 (1972) および鈴木康之 (1977: 48-55) は、日本語の受動文を次の4タイプに分けている。

(1) a. 直接対象の受身

太郎が次郎をなぐった。→次郎が太郎になぐられた。

b. 相手の受身

太郎が次郎に英語を教えた。→次郎が太郎に英語を教えられた。

c. 持ち主の受身

太郎が次郎の自転車を壊した。→次郎が太郎に自転車を壊された。

d. 第三者の受身

みんなは雨に降られた。

太郎は花子に死なれてしまった。

上記のような複数の受動文形態、特に「第三者の受身」の存在が日本語特有の現象として説明されてきたが、実際、中国語にも類似した受動文「被構文」が存在している。中国語では動詞の自他对立体系や語尾形態などを持たないので、日本語の受動文をそのまま被構文に置き換える保証はないが、類似した構文形態は見られる。

(2) a. 直接対象の受身 (対格受動文)

次郎被太郎打了。／次郎は太郎に殴られた。

b. 相手の受身 (与格受動文)

次郎被太郎问了很多问题。／次郎は太郎からいろいろ質問された。

c. 持ち主の受身 (属格受動文)

次郎被太郎弄坏了自行车。／次郎は太郎に自転車を壊された。

d. 第三者の受身 (受影項受動文)

我被邻居的孩子哭了一夜。／私は隣の子に一晩中泣かれた。

中国語は日本語と同じように多様な受動文バリエーションを持っているが、日本語と比べて受動文の使用率が相対的に低い。それは構文形態からの制約ではなく、意味からの制約による結果と考えられる。中国語では、動詞の自他对立体系を持たないので、受動の意味を表すには被構文と並行して「意味的受動文」や「受動動詞文」なども用いられる。そのため、受動者の視点から事象を捉えるには被構文が唯一の表現手段ではない。それに対して、日本語の動詞は自他对立の体系を持っているので、その体系の中で動詞受動態が自動詞的な役割を果たす場合もある。それが中国語より受動文が多用される一因と考えられる。

日本語の受動文について、益岡隆志 (2000: 55-69) では次のように分類している。

(3) a. 属性叙述受動文：この祭りは毎年七月に行われる。

この部屋は当時の皇帝に愛用されていた。

b. 受影受動文：私は幼少年代に祖母に育てられた。

鈴木さんは先生に息子をほめられた。

(私は) 彼に逃げられると困るので、…

鈴木さんは山田先生に吉田さんの息子をほめられた。

c. 降格受動文：麻沙子の目の前に一輪の赤いバラが差し出された。

相撲は、建仁寺の境内の空き地で行われた。

(益岡隆志 2000 に基づいて整理)

益岡 (2000) は、「属性叙述受動文」と「受影受動文」を「昇格受動文」として「降格受動文」と区別し、「受影受動文」と「降格受動文」を「事象叙述受動文」として「属性叙述受動文」と区別している。益岡隆志 (1982) では松下大三郎 (1930) などの考え方を踏まえて、「受影受動文」は日本語固有のものであり、西洋文体の影響により「降格受動文」や「属性叙述受動文」が次第に増えてきた、と指摘している。

中国語の被構文も、伝統的に「害を被る」という意味で使われてきた。西洋語の翻訳などの影響で受益または中立的な意味にも使われるようになってきているが、日本語と比べて被構文の使用率がまだ低く、話しことばでは依然として「被害」の意味が主流である。

木村英樹 (1997) は、中国語の被構文の主語が「受影者」(affectee) の性質を持っていると指摘している。また、中国語の被構文は「主語に立つ対象が単に動作行為を受けることを述べるだけでは成立し難く、動作行為の結果として対象が被る何らかの状態変化を明示する表現を述語成分に要求する」(木村・楊 2008: 69) としている。その意味上の特徴は、日本語の受影受動文にも通じるので、利害関係を表す点では中国語の被構文と日本語の受影受動文が類似していると言える。

王亜新 (2011) では、日本語と中国語はともに「主題卓越型言語」(topic-prominent language) に属し、「題述文」(topic-comment sentence) という構文形態を共有することで、論理的な項構造 (argument structure) の制約を超えて、多様な構文バリエーションを作り出すことが可能になっている。それは、日本語と中国語に共通に見られる現象だと指摘している。

2. 題述文としての受動文

日本語と中国語の受動文に共通に見られる特徴は、「受影」と「受動」の分化である。日本語と中国語が共有する題述文がそのような分化を可能にする構文的条件を提供しているのである。

題述文としての受動文では、能動文の述語項構造の制約を超えて、受影者を主題 (topic) とすることが可能になる。例えば (1c) の「持ち主の受身」は属格が主語 (主題)² に昇格する例であるが、その構造はすでに能動文の述語項構造をはみ出している。

(1c) のような「持ち主の受身」が可能なのは、日本語固有の受動文では有情物を主題とする伝統

² 題述文においては、「主語」よりも「主題」とするのが普通であるが、構文レベルでは「主語」としたほうが合理だと考える。本論では区別する必要がある場合にのみ「主題」と「主語」を使い分けている。

に関係している。つまり、非情物よりも有情物のほうが影響を受けるという発想である。「持ち主の受身」は受影という意味では、必ずしも受動文プロトタイプとしての「直接対象の受身」から大きく外れていないが、その構文形態が多様な受動文バリエーションを生み出す構文的条件を提供している。題述文における「主題―解説」関係では、「解説」の部分が項構造の拘束から解かれ、より多くの意味関係を表すことが可能になり、構文の項配置や意味関係も能動文と異なってくるのである。

日本語の受動文において、目的語（を格）の残留が長年、議論されてきたテーマの一つであるが、実際、目的語残留は英語を含めて多くの言語に見られる現象である。一般に、二重目的語をとる動詞の多くが目的語残留の形で受動文に用いられる。

(4) a. She was told a long story.／彼女は長い話を聞かされた。

b. The students were asked a very difficult question.／学生たちはとても難しい問題を聞かれた。

間接目的語（与格）を主語に受動文を作る時、直接目的語（対格）が述語に残留することは項構造から見て合理的である。二重目的語構文は「動作主格＋与格＋対格」のように項が3つあり、対格と与格のいずれも主語にして受動文を構築することが可能である。その点では、日本語の「相手の受身」も特別な構文形態ではない。ただし、日本語では厳密に二重目的語を持つ動詞という区分がなく、ほとんどの他動詞が「～に」という形態で与格をとることができるので、それだけ「相手の受身」の使用も多くなっているのである。

一方、日本語では、題述文のもとで二項動詞述語文における「動作主格＋対格」という項構造を超えて、新たに属格を主語に昇格（主題化）させ、「持ち主の受身」を作ることができる。「持ち主の受身」は「相手の受身」と意味関係では異なっているが、目的語残留という点では類似した文構造を持っている。また、「持ち主の受身」における「モノの所有」から「コトの所有」への拡張を通じて「第三者の受身」につながっているとも考えられる。

(5) a. 太郎は次郎に自転車を壊された。(太郎は「自転車」(モノ)を所有)

b. 太郎は父に死なれた。(太郎は「父」(モノ)を所有)

c. 太郎は花子に泣かれた。(太郎は「花子に泣かれた」コトを所有)

(5a) では、太郎は「自転車」(モノ)の所有者として、「壊される」コトを体験し、(5b) では「父(モノ)」の所有者として「父が死ぬ」コトを体験する。一方(5c) では、太郎は「花子」を所有しないが、「花子が泣く」コトを体験するという意味で(5b) と類似した意味関係が形成されている。つまり、(5a) と(5b) の主語はモノの所有者と受影者という二重の役割を果たしているが、(5c) の主語はモノの所有者ではないものの、受影者としては(5b) の主語と同じ役割を果たしているのである。

「受影」という点から見れば、(5a) の「次郎が自転車を壊す」コトや(5b) の「父が死ぬ」コトおよび(5c) の「花子が泣く」コトを体験すること自体は、直接と間接の区別がない。しかし、構文レベルで受影者を述語の項構造に納められるか否かにおいて直接と間接に分かれている。

題述文としての受動文の最大の特徴は、主語が対格でなくてもよいことである。与格と属格はある意味で項構造に何らかの関わりを持つ要素（直接項）であるが、それが拡張して、項構造に組み込まれない要素（間接項）も主語にすることができるようになると、受動文の構造は能動文の述語項構造から大きく外れることになる。その意味では、題述文としての受動文は基本的に能動文を前提としないと考えられる。

一方、対格以外の成分を主語に、そして対格³を述語に残留させることは、「受影者（受影項）」と「受動者（受動項）」の分化を意味している。その分化は次の2点に現れている。一つは、同一構文内における受影と受動の分化で、受影主語と受動目的語の併存であり、もう一つは、構文タイプの分化で、受動者を主語とする構文と、受影者を主語とする構文形態の併存である。

受動文の主語の意味役割からみれば、(1a)の主語は受動者である同時に受影者であるが、(1b)と(1c)では与格と属格が受影者として主語となり、受動者（受動項）が目的語となっている。そのような分化は、受動文の主語を項構造から解放し、より広く受影者を受け入れることを可能にし、そして「第三者の受身」への拡張に動機づけていると考えられる。

中国語も題述文が発達している言語として、日本語と同じように多様な受動文バリエーションを持っている。(2)で示されたように、被構文の主語も対格のほか、与格や属格を受け入れている。また(2d)のような「第三者の受身」も存在している。

日本語の受影受動文に複数のタイプがあり、述語は2項動詞句と1項動詞句のほか、「が格」による受動節も可能である。

- (6) a. 太郎の息子が殺された。
- b. 太郎は息子を殺された。
- c. 太郎は息子に死なれた。
- d. 太郎は息子が殺された。
- e. 太郎は息子が交通事故で命を奪われた。

(6a)の主語「太郎の息子」は受動者兼受影者であるが、(6b)～(6e)の主語「太郎」は「息子が死ぬ」事象を体験する受影者として捉えられている。題述文という構文形態では複数の構文バリエーションが可能なので、(6b)「持ち主の受身」、(6c)「第三者の受身」のほかに、(6d)(6e)のような「主述述語文」の形態をとる受動文も存在する。

(6)の各例における「太郎」はいずれも「息子」の属格として解釈でき、また「息子が死ぬ」というコトの受影者として機能している。従来の受動文研究では(6d)(6e)のような例にあまり触れていないが、実際の表現では多くの例が見受けられる。

- (7) a. (宇喜田萌は)かつては明るく元気な性格だったが、家族を殺され、自らもレイプされて精神を閉じてしまった。(『ダーク・シェル』, asahi.com, 2002年12月)

³ 目的語残留の場合は、「～を」のすべてが「対格」ではなく、慣用句的な動詞句に含まれる「～を」も含まれるが、紙幅の関係でこれに関する議論を省略する。

- b. (宇喜田智子は) 家族が殺され, 難民となって妹の萌や仲間と逃亡。精神的に病んだ萌の為に必要以上に世話を焼いている。(同上, asahi.com, 2002 年 12 月)

(7a)「家族を殺される」と(7b)「家族が殺される」は構文タイプが異なっているが、主語が受影者である点では共通している。そのような受動文の存在が同一事象を異なった視点から捉える事象認知の多様性と、題述文という構文形態の多様性を示している。

中国語の被構文も多様な構文バリエーションを持っている。

- (8) a. 太郎的儿子被(強盗)杀了。
 b. 太郎被(強盗)杀了儿子。
 c. 太郎被強盗把儿子杀了。
 d. *太郎被儿子死了。
 e. 太郎(去年)儿子被(強盗)杀了。
 f. 太郎(去年)儿子被(交通事故)夺去了生命。

(8b) は目的語残留の形で成立可能であるが、「儿子」は影響を受ける有情物にあたるので、(8e) のほうがより自然である。(8c) も目的語残留の形で(8b)に近いが、「把構文」で事象の因果関係を顕在化させているので、「強盗」が必須成分となっている。(8d) が成立しないのは「死」が中国語で非対格動詞であることに関係している。(8e) と(8f) は「主述述語文」の形を取っているが、中国語では広く用いられている構文形態である。

中国語において、同一構文内における受影と受動の分化は昔から存在している。李珊(1994)ではそのような例が多く示されている。

- (9) a. 赵姨娘……被贾母照脸啐了一口唾沫。(红楼梦, 第25回)
 b. 贾政还要打时, 早被王夫人抱住板子。(红楼梦, 第33回)

(9a) の主語は「相手」、(9b) の主語は「持ち主」であるが、いずれも受影者として振る舞っている。受影と受動の分化は、有情物を受影者にするという事象の捉え方に関わっているが、同時に題述文という構文形態の存在も不可欠である。その点では、日本語と中国語が類似している。

一方、日本語において受影と受動の分化の過程で、受影の意味を取り除き、受動のみの「中立受動文」が形成されている。それが益岡隆志(2000)が提示した「属性叙述受動文」と「降格受動文」である。

- (10) a. この祭りは毎年七月に行われる。／这个庆祝活动每年七月(*被)举行。
 b. 相撲は、建仁寺の境内の空き地で行われた。／相扑是在建仁寺内的空场上(*被)举行的。

(10a) は「属性叙述受動文」、(10b) は「降格受動文」で、その場合の動詞受動態は準自動詞的な働きをしている。このタイプの受動文は動作者が言及されなくてよい点で、むしろ非対格動詞構文に類似している。

それに対して、中国語では受影と受動の分化により、受影者を主語とする被構文が多く作られるも

の、受動のみの「中立受動」を表す被構文は話し言葉ではまだ少ない。ただし、被構文の使用増加に伴い、受動のみの被構文は書き言葉では見られるようになっていく。

- (11) a. 欧洲的浪漫主义文学通常被分为两类。(茅盾：夜读偶记)
 b. 今天，这里被称为黄河三角洲。(人民文学，1988年10月号，p 79)
 c. 2015年，旅发大会的第十个年头。新一轮旅发大会被赋予了更顽强的生命力，再次从安顺出发。(贵阳网，2015年7月8日)
 d. 一名在9月29日交了200元介绍费的大一新生告诉记者，他被介绍到沙坪坝一单位面试，却被告知人员已满，职介所又介绍他去当搬运工，每天只有35元，与工作人员先前声称的“日薪100元至120元”相去甚远。(重庆晨报网，2008年10月2日)

(11a)の“被”は話し言葉では使わなくてよい。(11b)と(11c)は主語が無情物なのでほぼ中立的受動となっているが、(11d)は主語が有情物なので、やはり不本意の意味を伴っている。その点から見れば被構文はまだ完全に中立的になっていない。しかし、その使用範囲が徐々に拡大しているのに伴い、中立受動文が増えているのも事実である。

中国語では動詞の自他対立体系を持たず、形態的制約から被構文の使用が義務づけられていないので、受動のみを表す日本語の「属性叙述受動文」や「降格受動文」に対して、(10)の中国語訳で示されたように、「意味的受動文」や「“是…的”文」などで対応している場合が多い。また、中国語では動作者の導入も“被”だけでなく、“由”など他の選択肢が可能である。

- (12) a. 所有的会议都由他主持。／すべての会議は彼が司会する。
 b. ?所有的会议都被他主持。／すべての会議は彼によって司会される。
 (13) a. 权力由少数人掌握。／権力は少数の人が掌握している。
 b. 权力被少数人掌握。／権力は少数の人に掌握されている。

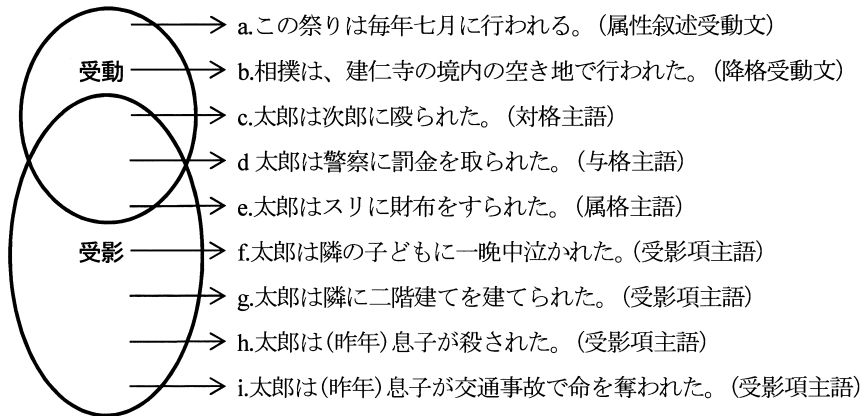
(12a)では動作者が“由”によって導入されているので、被構文と同じ視点で事象を捉えていながら、受影の意味が回避されている。それに対して(12b)は特別の文脈がなければ不自然となる。

(13)は両方とも成立するが、(13a)は中立的で、(13b)は受影の意味を伴っている⁴。

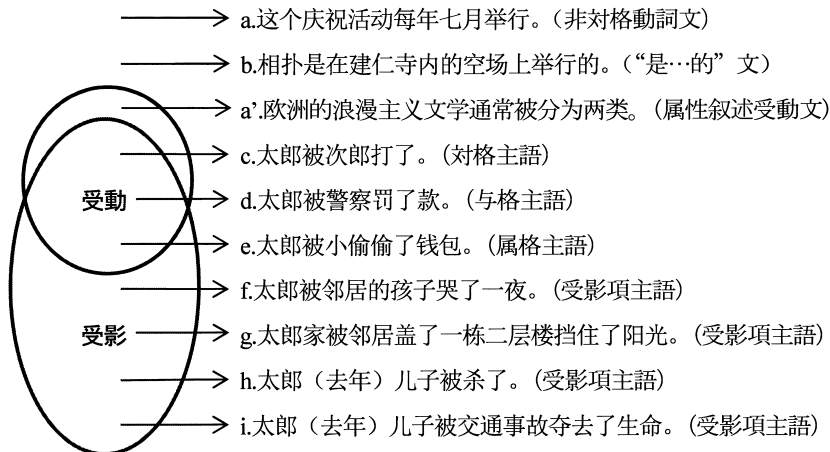
日本語と中国語の受動文の対応関係を図にすると次のようになる。日中間で類似性を持っていないながらも部分的にずれていることがわかる。

⁴ この場合の受影者は必ずしも“权力”自身ではなく、言外にある（話し手または他の受影者の）場合も考えられる。

(14) 日本語の場合



(15) 中国語の場合



日本語と中国語において (14c) と (15c) のような、主語が「受動+受影」両方の役割を果たす受動文がプロトタイプとなっている。一方、(14d) (15d) のような「相手の受身」と (14e) (15e) のような「持ち主の受身」では、題述文として文全体が「受影+受動」の意味関係を表しながらも構文内で受影項と受動項の分化が起きている。また (14f～i) と (15f～i) に見られるように、日本語と中国語では受影の意味が拡張して、多くの構文バリエーションが形成されているが、それに対して、(14a - b) のような受動のみを表す中立受動文は、動詞の自他対立体系を持つ日本語では多用されるものの、その体系を持たない中国語では使用率が低く、他の構文形態で対応される場合が多い。

受影受動文の多くは題述文という構文形態をとっている。その形態では「受影者(受影項)」が項構造の必須項となり、対格、与格、属格および第三者受影者などを統合して直接項として振る舞っている。それに伴い、述語が能動文より複雑な構造を持つようになり、目的語残留のほか、「～が」格を伴う受動節も受け入れることが可能になっている。

3. 受動文の構文的特徴

3.1. 受動文と使役文

受動文は、よく能動文との対立で論じられているが、日本語と中国語の受動文も能動文と何らかの形で対立関係を持っていることは認める。しかし、そのような対立関係は能動文との間だけでなく、使役文を含めてより広い構文ネットワークの中で捉えるべきである。

- (16) a. 太郎がグラスを割った。
 b. グラスは太郎に割られた。
 c. 花子は太郎にグラスを割らせた。
 d. 花子は太郎にグラスを割られた。

(16a) は能動文で、(16b) は対格受動文である。(16c) は (16a) から派生した使役文であるが、「花子」はもとの項構造にはない要素である。同じく (16d) の「花子」も (16a) にない要素であるが、「花子」が自ずと「グラス」の所有者として関連づけられ、属格受動文と解釈される。(16) の「割る」は他動詞であるが、自動詞の場合でも類似した操作が可能である。

- (17) a. 太郎は花子の横に座った。
 b. ?花子の横は太郎に座られた。
 c. 花子は太郎を横に座らせた。
 d. 花子は太郎に横に座られた。

(17c) は使役文で、(17d) は第三者の受身である。

(16) と (17) の間では類似した構文操作が見られる。意味から見れば使役と受動は両極端に分かれるが、構文変化の類似性からみれば似たような構造を持っている。日本語では、使役文が多様な意味関係を表し、多くの構文バリエーションを持っているのと同じように、受動文も多様な意味関係と多様な構文バリエーションを持っている。それは、受動文と使役文が意味と構文において何らかの関連性を持っていることを意味している。

中国語にも類似した現象が見られる。

- (18) a. 太郎打碎了玻璃杯。／太郎がグラスを割った。
 b. 玻璃杯被太郎打碎了。／グラスは太郎に割られた。
 c. 花子让太郎打碎了玻璃杯。／花子は太郎にグラスを割らせた。
 d. 花子被太郎打碎了玻璃杯。／花子は太郎にグラスを割られた。

中国語では、被構文と使役文が同じ構造を持っている。使役文に用いられる“让／叫”は受動の意味にも用いられるので、(18c) は文脈によっては使役と受動の両方に解釈されることが可能である。被構文と使役句の共通点は主語と「第三者による行為」との関わりを表すことで、相異点は第三者行為との関わりの中で、被構文の主語は受影（受動）者であり、使役文の主語は使役者であるということである。

中国語の被構文は、日本語と異なって語彙的形態を伴わないので、述部が動詞句だけでなく、連述

構造で働く場合もある。李珊 (1994: 10-11) の用例であるが、

- (19) a. 狗娃放狗咬破了他的衣服。／狗娃は犬を放して彼の服を噛み破らせた。
b. 他被狗娃放狗咬破了衣服。／彼は狗娃が放した犬に服を噛み破られた。

上の文を次のように書き換えることができる。

- (20) a. 狗娃的狗咬破了他的衣服。／狗娃の犬が彼の服を噛み破った。
b. 他的衣服被狗娃的狗咬破了。／彼の服は狗娃の犬に噛み破られた。

(20a) は能動文で、(20b) は直接受動文である。それに対して (19a) は“狗”の属格“狗娃”を主語に昇格させた使役文であり、(19b) は“衣服”の属格“他”を主語に昇格させた受動文である。

日本語と中国語における使役と受身は、主語の「第三者行為」との関わりという視点から事象を捉える点で類似している。また、使役主体を主語にする使役文の構文的操作と、受影主体を主語にする受動文の構文的操作にも類似性が見られる。さらに、使役文は日本語では自他動詞の両方を受け入れるのと同じように、受動文でも自他動詞の両方を受け入れている。その意味では、日本語と中国語の受動文を能動文からの構文バリエーションと見るよりは、より広い構文ネットワークの観点から捉える必要がある。

3.2. 非能格動詞と非対格動詞

受動文のプロトタイプは、受影（受動）者は外力による影響を受けることを表しているの、動作対象への働きかけが強ければ強いほど、動詞として受動文に用いられやすい。また、日本語と中国語では自動詞による受動文が作られるが、動作者の意志を伴う非能格動詞が多く用いられるのに対して、単なる状態や変化を表す非対格動詞はあまり用られない傾向が見られる。ただし、日本語と中国語において非能格動詞と非対格動詞の分類は必ずしも共通していない。また、中国語は動詞の自他対立体系を持たないので、日本語とかなり異なった側面も見られる。

- (21) a. 彼の父が死んだ。／他的父亲死了。
b. 彼は父に死なれた。／*他被父亲死了。→他死了父亲。
(22) a. 我が家に泥棒が入った。／我家进小偷了。→?小偷进我家了。
b. 我が家は泥棒に入られた。／?我家被小偷进（来）了。
(23) a. 関東地域に地震が起きた。／关东地区发生了地震。
b. *関東地域は地震に起きられた。／*关东地区被发生了地震。

(21) の「死ぬ」は日本語では受動文に用いられるが、中国語では非対格動詞なので受動文に用いられない。沈家煊 (2006: 291-294) によれば、「死」のような消失義を伴う非対格動詞は、消失義を伴う他動詞と同じように用いられるので、主語は事象の「体験者」(experiencer) として影響を受けると指摘している。その意味では、構文形態こそ異なっているが、(21b) の受動文に対して中国語では他動詞文で対応することになる。その場合、受動文における「受影者」は能動文における「体験者」と役割が重なっているのである。

同じように、(22) の「入る」は日本語では非能格動詞であるが、中国語の“进”はその意味構造

では非対格動詞にあたる。中国語では(22a)のような現象生起を表すためには、ふつう「隠現文」が用いられるが、隠現文における“進”は現象発生方式として働き、非能格動詞に本来持っている意図性が消えてしまうので、(22a)“小偷进我家了”は不自然となり、“我家进小偷了”とすべきである。同じ理由により“進”は(22b)のように被構文にも使えなくなってしまう。

一方、(23)の「地震が起きる／发生地震」は、日本語と中国語ではともに非対格動詞となっているので、ふつう受動文に用いられない。日本語では(1d)「雨に降られる」などの例がよく見られるが、それはむしろ例外で、本来なら「雷が鳴る／地震が起きる／魚が腐る」などの非対格動詞を用いた自然現象文は受動文に用いられないはずである。しかし、高見健一(2011:60-61)によれば、特殊の文脈があれば、次のように、非対格動詞による受動文も成立可能である。

(24) a. 桜島にまた噴火され、地元の住民はとても困っている。

b. エアコンに故障されて、暑くてかなわなかった。

高見(2011)によれば、自然など何らかの力を持つものの変化が他者に影響をあたえることがあれば、非対格動詞による受動文も成立するとしている。その考えが正しければ、日本語では動詞の品詞分類よりも動詞(句)が置かれる意味条件によって受動文の使用が決められることになる。

中国語において、非対格動詞による被構文は基本的に不可であるが、非能格動詞による被構文は日本語より少ないながらも、ある程度は使用されている。

(25) a. 不小心被他逃掉了。

b. 他被邻居的孩子哭了一夜。

(26) a. 官军追杀了一阵，因为地形复杂，给郝摇旗逃跑了。(姚雪垠：李自成)

b. 后半截被大黄狗叫了一阵给搅乱了。(赵树理：三里湾)

ただし、中国語では非能格動詞による被構文も無条件に作られるのではなく、受影者への影響の有無によって選別されているようである。

3.3. 受動文の述語構造

受動文は、受影者の視点から事象を捉えるので、述語が具体的な動作よりもその動作によってもたらされた状態や変化を表している。その特徴は、特に中国語の被構文において顕著である。

中国語の被構文では述語がふつう「動詞+ α 」という形態を求めるとされている。「 α 」の部分は主として動作結果を表す要素であるが、動作の程度を表す数量詞も用いられる。

(27) a. 女儿被母亲狠狠地骂了一顿。

b. 小明被老师批评了一次。

c. 小李被(人)踢了一脚。

d. 桌子让小王拍了两下。(木村 1997 の用例)

木村英樹(1997:26)によれば、数量詞は動作に完結性や具体性などをもたらすことにより文を成立させているとしている。しかし(27a)は受影者の状態が暗示されているので自然な文であるが、(27b～d)のように、受影状態が暗示されなければ文に不足感が伴うことが多い。

中国語の被構文では、動作の具体性または完結性だけでは不十分で、受影者が動作の影響でどんな変化を起こし、またはどんな状態に置かれているかを求める傾向が強い。前後の文脈により、そのような状態変化が明言されなくてよい場合もあるが、明言される必要がある場合もある。

(28) a. 出了澡堂，被凉风一飏，他觉出身上的轻松。(老舍：骆驼祥子)

b. 后半截被大黄狗叫了一阵给搅乱了。(赵树理：三里湾)

(28a) は“(他)被凉风一飏”だけでは終わらず、後続の“觉出身上的轻松”という状態の説明があってはじめて文が完結する。(28b) も“后半截被大黄狗叫了一阵”だけでは不十分で、“给搅乱了”という状態の説明が必要である。特に(28b)のような「間接受動」の場合、その傾向が強いのである。

被構文では、動詞が具体的な動作よりも状態や変化を引き起こす「方法・方式」を表す働きが強いので、動詞に状態や変化の意味を伴わないと、仮に“了”や数量詞などを加えても文が完結しない場合が多くある。

(29) a. *他被老师问了。(与格受動)

b. ?他被老师问了一个问题。

b. 他被老师问了一个问题没答出来。

(30) a. *他被邻居的孩子哭了。(間接受動)

b. 他被邻居的孩子哭了一夜。

c. 他被邻居的孩子哭得一夜没睡好。

(29a) (30a) の「動詞+了」だけでは不十分である。(29b) (30b) は数量詞によって動作に完結性をもたらされたが、(30b) の“哭了一夜”から“没睡好”という状態が容易に推測されるので許容度が高いのに対して、(29b) では状態変化が推測されにくいので許容度が低くなる。それに比べて(29c) (30c) のように後続節で状態変化が明記されると安定度が高くなる。

被構文に用いられる動詞は具体的な動作を表さないので、動詞の自他区別を問わないことが多い。また、動詞は状態変化をもたらす「方法・方式」もしくは「起因」として働くので、動作者の非意図的行為を表す動詞も被構文に用いられる。

(31) a. *小李让小王咳嗽了。→小李让小王咳嗽醒了。(木村 1997 の用例)

b. *老李被小王打呼噜了。→老李被小王打呼噜打醒了。

(32) a. *头发被风刮了。→头发被风刮得很乱。

b. *小麦被这场雨下了。→小麦被这场雨下得减了产。

(31a) “咳嗽”と(31b) “打呼噜”は受影者の状態を引き起こす起因として働き、それによって引き起こされた状態を明言すれば被構文として成立する。その場合、“咳嗽”と“打呼噜”は自動詞か他動詞かは不問にされる。(32) の2例も同じである。

以上の例からわかることは、被構文の述語は「動詞+α」の形だけでなく、複合述語または複文の形をとる場合もある。後者の場合は被構文が方式・原因を表し、後続の動詞節が状態変化を表すとい

う構造となっている。

(33) a. 他被工作累病了。／彼は仕事に疲れて病気になった。

b. 我被邻居的孩子哭醒了。／私は隣の子に泣かれて目が醒めた。

c. 门被锁上了。／ドアがロックされた。

(34) a. 他被工作累得病倒了。／彼は仕事に疲れて病気になった。

b. 我被邻居的孩子哭了一夜，根本没睡着。／私は隣の子に一晚泣かれて全然眠れなかった。

c. 门被锁了一把锁，谁也进不去。／ドアがロックされて誰も入れない。

(33) はいずれも単文であるが、(34a) は複合述語で、(34b) (34c) は複文である。複文の場合、被構文は原因節として機能している。

次は実際の用例である。

(35) a. 一天欢喜被吴良辅搅了，康熙很觉扫兴。(二月河：康熙大帝，第2回)

b. 不料郝老四急变一招，赵逢春竟扑了个空，被郝老四当胸一掌，一个屁股墩跌坐在地下。
(二月河：康熙大帝，第23回)

c. 今儿我们本来很高兴的，被这翠环一个人不痛快，惹的我也不痛快了。(刘鹗：老残游记，p 71)

下線部の被構文はいずれも単文では成立せず、後続の状態説明が必要である。中では (35c) のように形容詞による例も見られる。

日本語にも類似した現象が見られる。高見健一 (2011: 65) によれば、

(36) a. ??/*花子に CD をかけられた。

b. ?花子に CD を大きな音でかけられた。

c. 勉強しているのに、花子に CD をかけられた。

(36a) と (36b) の受動だけの意味では文が不自然であるが、(36c) のように、受影者の状態変化を暗示する内容となれば文が自然になる。そのほか、次のように「第三者の受身」で「～(ら)れる」節の後に状態や変化を示す内容を追加してはじめて成立する例もある (高見 2011: p 66)。

(37) a. 大関に序盤から星を落とされると、(相撲は) つまらないからね。

b. 2階の人に午後ずっとピアノを弾かれ、うるさかった。

c. 今年もまた春先に杉花粉に飛ばれ、鼻がむずむずしてしょうがない。

d. エアコンに故障されて、暑くてかなわなかった。

日本語の受動表現、特に「第三者の受身」は単文で完結する場合と、単文では完結せず複文の形をとる場合がある。その基準は、単文で受影者の状態変化を含意するか否かに関わっているが、その点では中国語も同じである。中国語の受動表現も単独述語、複合述語、複文など様々な形があり、被構文が単文で完結する場合と、原因節として機能する場合に分かれている。

それに並行する現象として、中国語の被構文に用いられた動詞句が状態変化の起因や方法・方式を

表すので、動詞の項構造から外れるケースが多くある。

- (38) a. 我们家都被他吃穷了。
 b. ?他吃穷了我们家。
 c. 他把我们家吃穷了。
- (39) a. 手指被他(抽烟)抽得焦黄。
 b. ?他(抽烟)抽黄了手指。
 c. 他(抽烟)把手指抽得焦黄。

(38) “家”は“吃”の対象ではなく、(39) “手指”も“抽”の対象ではない。そのため、一般他動詞文である(38b) (39b)では不自然となる。それは、一般他動詞文はふつう動作を表し、それゆえ動詞の動作機能から項構造の整合性を求める傾向が強いことに関係している。一方、(38c) (39c)の「“把”構文」では安定度が高くなる。それは、「“把”構文」が動作そのものよりも対象への処置や処置の結果を表すので、動詞が単なる処置の方法・方式を表しているからである。その点では、被構文と「“把”構文」が類似している。

「“把”構文」の動詞句は動作そのものを表さないので、構文レベルにおける動詞の自他区別もなくなり、動作者や動作対象などの名詞項も論理的な項構造から外れることが多くある。

- (40) a. 几杯酒就把他灌醉了。／酒数杯だけで彼を酔わせてしまった。
 b. 他被几杯酒灌醉了。／彼は酒数杯だけで酔わされてしまった。

(40a) “灌醉”の項構造では“酒”は道具格であるが、“灌醉”を引き起こす起因として働いている。その際“灌”は“醉”を引き起こす方法・方式として機能しているので、主語は動作主か道具かは区別されなくてよいことになる。(40b) “灌醉”も似たような働きをしている。その場合の動詞は次の場合の動詞の働きに似ている。

- (41) a. 衣服洗得不干净。／この服はきれいに洗っていない。
 b. 这支笔用得顺手。／このペンは使いやすい。
 c. 新买的车开起来很舒服。／この車は乗り心地がよい。

(41)において下線部の動詞は結果や様態を実現するための手段・方法を表し、実際、動作を行う主体は誰か、また動詞は他動詞か自動詞かなどは不問にされる。

従来の研究では、受動文の述語は他動性の強い動詞を求める傾向があるとしているが、確かに、他動性の強い動詞は動作対象への強い影響力を含意するので、動作対象が受影する意味が担保され、文が成立しやすいという側面がある。しかし、中国語の被構文は受影者の状態変化を表しているので、動詞はその状態を引き起こす方法や経路として機能している。そのため、他動性の強さよりも状態変化を引き起こす起因として機能するか否かによって選別されることが多い。その際、他動性は唯一の制約条件ではなくなり、自動詞も使用可能になっている。それが、日本語と中国語において他動詞受動文と自動詞受動文の両方が許容される意味上の動機づけと考えられる。

4. 非意図性と外因性

4.1. 非意図性

受動文の意味的特徴の一つは、受影者が自らの状態変化に関して非意図的である。

受動文の非意図性は、1) 受影者の非意図性、2) 動作または動作結果の非意図性、3) 動作者の不定など、三つの側面から観察される。

受動文の主語が非情物の場合は、受動者の非意図性が現れている。

- (42) a. グラスは太郎に割られた。
b. この会議は年に一回開催されている。

主語が非情物である場合、状態変化や動作結果が主に話し手から見て非意図的である。そのため、(42a) のような非情物主語の場合でも受影受動文となることが多い。その場合、「グラス」を「擬人」⁵的な受影者とも解釈できるが、意味的に「グラスが割れた」ことが誰か（当事者か話し手など）にとって不都合だという解釈も可能である。

非意図性のもう一つの特徴は動作や動作結果の非意図性である。特に中国語の被構文ではその傾向が強い。

- (43) a. 飯烧好了。／ご飯が炊けた。
b. ?飯被烧好了。／?ご飯が炊かれた。
c. 飯被烧糊了。／ご飯が焦がされた。

(43a) は動作者（または話し手）の意図した結果を表している。そのため、(43b) のような被構文が不自然になるが、(43c) は非意図の結果を表しているので被構文として自然である。

受影者が有情物の場合でも動作による結果状態が受影者にとって非意図的であるのが一般的である。

- (44) a. 次郎は太郎に殴られた。／次郎被太郎打了。
b. 私は母に日記を読まれた。／我被妈妈（偷）看了日记。
c. 私たちは誰かに見られている。／我们被人盯着。

一般に動作者がある動作を行う際、結果を意図するので、意図どおりの結果が出ればポジティブと捉え、意図しなかった結果が出ればネガティブと捉える。受影文に付随する「不本意」などのニュアンスもこのような「結果の非意図性」に由来するものと考えられる。

木村英樹（1997：24-26）では“打”などの動詞は“了”を伴った形で已然の行為には用いられるが、未然には用いられない。ただし「動詞＋結果補語」の形では未然に用いられると指摘している。

- (45) a. 小红让她妈妈打了。
b. *小红明天会让她妈妈打。
(46) a. 我肯定会被小王打死。

⁵ 松下大三郎（1930）は非情物を主語にして擬人的に「利害の被動」を表す受動文があると指摘している。

b. 帽子放在这儿, 就会被风吹走。

木村によれば(46)が可能なのは、「動詞+結果補語」が強い他動性と結果性を持っているからだとしている。

(45) が成立しないのは、結果性のほか、動作の非意図性にも関係していると考えられる。受動事象の発生は、受影者または話し手にとって非意図的なので、その受動事象への予測はふつう立たない。(45a) の“打”は已然の場合は状態を表すので成立するが、未然の場合は状態への予測ではなく、動作への予測となるので、文が成立しなくなる。それに対して、(46)は動作への予測ではなく、状態への予測なので可能となる。つまり、(46a)は“死”、(46b)は“走(=消失)”への予測であり、それぞれ“遇见小王, 我肯定会死。”や“帽子放在这儿一定会没了。”と同義である。

中国語において、「被+動詞」は已然の形では状態を表し、未然の形では動作を表すのが一般である。そのため、「被+動詞」はほとんど未然の意味には用いられず、代わりに受動動詞など他の手段が用いられる。

(47) a. *小红明天会让她妈妈打。→小红明天会挨她妈妈打。

b. ?我想被老师表扬。→我想得到老师表扬。

c. *你要被打吗? →你要找打吗?

受動動詞は「影響を受ける」という意味では「被+動詞」に通じるが、能動詞としては一般他動詞に共通した機能を持っているので、未然(予測など)にも用いられる。

動作の結果はポジティブでも、話し手にとって非意図的な事象であれば被構文の使用が可能である。杉村博文(2004: 30-31)では次の例をあげている。

(48) a. 这台电脑居然让你给修好了。(このパソコンはなんとあなたに直されてよかった)

b. 孩子居然让你给哄好了。(この子はなんとあなたにあやされて機嫌をなおした)

c. 今天我居然被领导表扬了一番。(今日はなんと上司にしっかりほめられてしまった)

杉村(2004)は、被構文の本質を「受事を視点(perspective)に意外な事態との遭遇を描く」として捉えているが、「意外性」や「予想外」などはいずれも事象の生起が「非意図」的であるという点から解釈することができる。

非意図性のもう一つの現れは、動作者への非予測性である。

受動文の主語はふつう定名詞句を求めるが、それに対して動作者の定不定に関する制約はない。それは、動作が非予測であれば動作者も非予測であることに関係している。李珊(1997: 57-59)によれば、中国語の被構文では動作者が定名詞句よりも不定名詞句の場合が多いと指摘している。次は李珊(1997: 58)がとりあげた実例である。

(49) a. 那个陈列柜上的玻璃被人取掉放在墙根。(法制日报, 1990年9月21日)

b. 猛一下站起来, 肩膀上又被一个东西碰了一下。(冯骥才: 三里湾)

c. 我被一种无名的情绪感动起来。(冯骥才: 他在人间)

d. 傻妹子被什么东西绊了一下。(冯骥才: 神灯前传)

日本語の受動文における動作者の定不定に関する調査はないが、属性記述受動文や降格受動文などで動作者が背景化される場合が多い点から見れば、動作者の不定は許容されていると考えられる。

先述したように、中国語の受動文は前置詞“被”のほか、“让”“叫”も使われる。その際、受動文と使役文を区別する意味的指標の一つは意図性の有無である。

- (50) a. 我叫他把电脑弄坏了。 (使役／受動)
- b. 电脑居然叫他弄好了。 (受動)
- (51) a. 外墙让风吹雨打得褪了色。 (受動)
- b. 脚让新鞋磨出一个泡。 (受動)
- (52) a. 衣服叫他好好儿洗了一遍。 (使役)
- b. 衣服居然叫他洗干净了。 (受動)

(50a)は受動と使役の両方に解釈される。“我”に意図性なしと読めば受動となり、“我”に意図性ありと読めば使役となる。(50b)はポジティブな結果にもかかわらず、“居然”で非意図的な結果を表すので受動と読まれる。(51)は非意図的な自然現象で受動となる。(52a)の主語は非情物であるが、動作に意図性を伴うので使役と読まれ、その意図者は話し手か文脈によって示された使役者である。(52b)も非意図的結果なので受動と読まれる。

4.2. 外因性

題述文が発達している日本語と中国語において、単に受動者の視点から事象を捉えるためには、受動文は必然的な構文形態ではなく、ほかの構文形態も可能である。受動文が選択される理由は、上に述べた受影性と非意図性のほかに、事象の発生が外因によるものと主張することにも関係している。

すでに述べたように、中国語では単なる結果状態を表すには非対格動詞文なども可能である。

- (53) a. 中国队打败了韩国队。／中国チームは韓国チームを破った。
- b. 中国队打败了。／中国チームが破れた。
- c. 中国队被打败了。／中国チームが破られた。

(53a)の“打败”は他動詞であるが、(53b)の“打败”は第一義的には非対格動詞である。“打败”には“打”と“败”の二つの意味素が含まれるが、結果義を表す“败”が優先される。(53b)と(53c)の違いは、(53c)が状態の発生は外因によるもので、動作者の存在を主張している。その意味で、被構文における“被”は一次的には動作者を導入するための前置詞であり、助動詞としての用法は派生的である。その点では“被”と同じ働きをする“让”“叫”⁶も同じである。

日本語でも降格受動文と非対格自動詞文を比べて、前者のほうが動作者の存在が暗示されるニュアンスを伴っている。

- (54) a. 死者の財布が残っている。／死者的钱包还在。
- b. 死者の財布が残されている。／死者的钱包被留下了。

⁶ “让／叫”は後に名詞句を求める点では動詞性が強いとされているが、“被”も発生的には動詞で後に名詞句を求める（前置詞的）用法が一次的であると考えられる。

(54a) に比べて、(54b) は「死者」以外の第三者の存在が暗示され、「財布が残る」ことは人為的結果と解釈されることが多い。中国語訳でも同じニュアンスを伴っている。

中国語の被構文は話し手の再帰動作を表す場合がある。

(55) a. 我被雪滑倒了。／私は雪で滑った。(李珊 1997 の用例)

b. 小李被石头绊倒了好几次。／李さんは石で何度も躓いた。

c. 他被门掩了手。／彼はドアで手を挟まれた。

李珊 (1997: 53-54) は、(55a) の動作者は“雪”ではなく“我”であり、“雪”は単なる原因だと指摘している。その点では (55b) も類似している。(55a) (55b) は再帰行為で、被構文に用いられるのは、事象の生起が外因によるもので、主体の意図と無関係だと主張するためである。

日本語では (55a) (55b) の意味では受動文が用いられないが、(55c) のように「で格」で起因を表す例が見られる。日本語の受動文は本来、第一人称による再帰行為を表すことはできないが、結果は外因によるものだと主張している意味で再帰行為と受け止められるような受動文も見られる。

(56) a. 指先はナイフで切られて血が出ている。

b. ノコギリで切られた指の生々しい傷跡……

c. 子どもが(車のパワーウインドの) 操作を自分で行い、誤って手の指を挟まれ怪我した事故が起きている。

(56) の各例は第三者行為ではなく、受影者(実質的な動作者)が自らの不注意によってもたらされた結果を表しているが、結果の非意図性および外因性を主張するために受動文が用いられたのである。

5. 視角と主体化

日本語の受動文の使用は、話し手の視角に関わるほかに、話し手が受影者と同一立場から事象を捉えるという「主体化」(subjectification) の特徴も伴っている。主体化とは、客観的な事象を話し手自身に関わりのある事象として捉えるということであるが、特に日本語のほうに顕著に現れている。

日本語の受動文における典型的な事例として、話し手自身を動作者にすることができないということである。それは、話し手が受影者と同じ視角を保持しながら、その対極にある動作者にさらに自分を重ねることに齟齬が生じることに関係している。

(57) a. *太郎は私に殴られた。／太郎被我打了。

b. *花子のリンゴは私に食べられた。／花子的苹果被我吃了。

(57) の中国語訳でわかるように、被構文は第一人称による動作にも用いられる。また、次の (58) のように、再帰行為を表すことも可能である。中国語の被構文は、受影者と第三者のいずれの立場からでも事象を捉えることが可能なので、日本語と比べて視角の切り替えが相対的に自由である。

(58) a. 花子的苹果被我吃了。 (第三者的視角)

／*花子のリンゴは私に食べられた。

- b. 花子の苹果被她自己吃了。 (第三者の視角)
 /?花子のリングは彼女自身によって食べられた。
- c. 苹果被花子吃了。 (主体的視角)
 /リングは花子に食べられた。
- d. 花子の苹果被人吃了。 (主体的視角)
 /花子のリングは誰かに食べられた。

(58a) と (58b) は日本語では不可であるが、中国語では可能である。その場合、中国語の被構文は主として事象の非意図性と外因性を表している。

一方、中国語でも話し手が受影者と同一立場をとるという主体化の現象が見られる。例えば (58c) は特別な文脈がなければ、ふつう話し手が「リング」の所有者と解釈される。(58d) も話し手が「花子」と同一視角を保持している。また、主語が無情物の場合は、特別な文脈がなければ、基本的に第一人称（話し手）が受影者となる。

- (59) a. 手指被水果刀划破了。/指がナイフで切られた。
 b. 衣服被汗水湿透了。/服が汗で濡れている。
 b. 鞋底被磨穿了。/?靴底が履き破られた。

また、中国語において受影者は有情物の場合が多いが、それに対して動作者は有情物を求めるという制約がなく、道具や原因などを動作者扱いにすることが可能である。

- (60) a. 我被这个故事深深地打动了。/私はこの話に深く感動した。
 b. 他被绳子捆住了双手。/彼は紐で両手を縛られている。
 c. 那个房子被白漆刷得很白。/あの家は白いペンキで白く塗られている。

上の日本語訳からわかるように、日本語の受動文では動作者と道具を区別し、動作者を受影者と対等な立場に有情者（有意志者）として捉える傾向がある。日本語では能動文と受動文に関係なく、人為的行為を起こすのは有情物であると考えer趣向があるので、動作者と道具を区別するのが一般的である。

中国語の被構文も、日本語と同じように有情物を主語とする傾向はあるが、非情物を主語とすることにも特に問題がなく、いわば両者併存の状況である。

- (61) a. 她的脚被人踩了一下。/?彼女の足は誰かに踏まれた。
 b. 她被人踩了一下脚。/彼女は誰かに足を踏まれた。

日本語から見れば、受影の場合は非情物よりも有情物のほうが影響を受けるので、「足を踏む」行為に対して「足」よりも「足」の持ち主が影響を感じるので「持ち主の受身」が選択されるのが多い。それに対して、中国語にも同様な発想が存在するが、単に物理的に事象を捉えることも可能である。従って、(61a) も問題なく使用される。その点から見れば、中国語では「主体的視角」は受動文を構成する上で重要な意味的指標になっていないようである。

一方、中国語には類像的に事象をとらえる傾向がある。そのため、被構文で扱う動作の対象は行為

が始まる前にすでに存在しているものとして捉えることが多い。その結果、生産行為よりも破壊行為を表す動詞が用いやすい。その点では「把構文」にも同じ傾向が見られる（張伯江 2001）。

(62) a. ?房子被盖了。／家が建てられた。

b. 房子被拆了。／家が壊された。

(63) a. ?把房子盖了。／家を建てた

b. 把房子拆了。／家を壊した。

日本語は、中国語ほど明確ではないが、(62a) (63a) の「家」と (62b) (63b) の「家」への解釈はやはり異なっている。(62a) (63a) の「家」はふつう不定名詞句で、特定されない対象と読まれるが、(62b) (63b) の「家」は定名詞句で、特定の対象と読まれる。つまり、後者の「家」は通常、既存物である「あの家」の意味を伴っているのに対して、前者はその意味を伴っていない。

益岡隆志 (1982: 54-55) は受影性の有無という側面からこの問題を捉えている。

(64) a. あの町は日本軍に破壊された。

b. あの町は日本軍に建設された。

益岡によれば、(64a) のほうがより自然なのは、「破壊する」の目的語「あの町」に物理的受影性が関与するが、それに対して (64b) 「建設する」の目的語には受影性が関与しないことに関係している。しかし、物理的受影からみれば「町」にとって「建設」も「破壊」も同等に関与しているはずである。むしろ、受影者である「町」に視点を定めてその状態変化を捉える際、「破壊」する前に「町」がすでに存在していたが、「建設」する前に「町」が存在していなかったという類像性に関係していると考えられる。

一方、日本語では、生産物の生起経緯を遡って述べる場合、時間、場所、方法、動作者などを説明するためにも受動文が用いられている。

(65) a. ?そのお寺は建てられた。

／?那个寺庙被建成了。

b. そのお寺は、9 世紀前半に建てられた (のだ)。

／那个寺庙是 9 世纪前半叶修建的。

c. そのお寺は、空海によって建てられた (のだ)。

／那个寺庙是由空海修建的。

破壊義を伴う動詞は無条件に用いられるのに対して、生産義を伴う動詞は、それに関連する要素を伴った形で「有標」となる場合が多いのである。(65) の各例は益岡の分類では「降格受動文」となるが、成立するか否かは事象の生起順序を類像的に捉えるという主観性に関わっている特徴が日本語にも見られている。

(65) の中国語訳でわかるように、この意味では基本的に被構文が用いられず、「是……的」文などで対応されることが多い。また (65c) のように、動作主を“被”ではなく“由”で導入されたりしてネガティブな意味を回避しようとする傾向が見られる。

6. おわりに

松下大三郎（1930：157-171）は、日本語の受動文を「利害の被動」と「単純の被動」に分けている。松下によれば、「利害の被動」は「利害の主を一人格として取り扱い其れが或るものの動作に由って利害を被る意を表す被動」であり、「単純の被動」は「利害を被る意味その他特殊の意味の無い被動である。日本固有の言ひ方ではない」と指摘している。

中国語でも、昔から「害を被る」という意味で被構文が用いられ、単純な受動を表すには「意味的受動文」または「受動動詞文」が用いられてきた経緯がある。その意味では、日本語と中国語では「受影」と「受動」を最初から異なったものとして区別してきた伝統がある。

日本語と中国語は、題述文という構文形態を共有している。題述文では、主語と述語間で緩い「話題－解説」の意味関係を構成しているので、より多様な意味関係を受け入れ、多様な構文バリエーションを生み出している。

一方、日本語は動詞の自他对立というカテゴリーを持っているので、動詞の受動態が自動詞と同じく他動詞との対立的形態として用いられる側面が見られる。それに対して、中国語は語彙の受動態を持たないので、形態からの理由ではなく、意味からの理由で被構文が選択されているのである。そのため、日本語と中国語では受動文の使用率や構文的機能などの点で異なっているところも見られる。それが、現代日本語では中立受動文（単純の被動）と受影受動文（利害の被動）が併存することが可能なのに対して、中国語では基本的に受影受動文が主流であるという現象として現れている。現代中国語では、被構文が次第に発達して、書き言葉では受影と受動の両方の意味で用いられるようになってきているが、話し言葉ではまだ昔からの影響が強く残っている。そのため、受動文の使用率では日本語のほうが高いという結果がもたらされている。

日本語では、次のような受動文も見られる。

(66) a. 落下物は、落とし主に責任を問われる。

b. 落下物は、落とし主が責任を問われる。

「落下物」は主語（主題）ではあるが、動詞の「問う」の受影者および受動者ではない。「問われる」対象は「落とし主」である。(66a)は「落とし主に責任を問う」という動詞フレーズの格関係を変えずに受動態にしているが、(66b)は「落下物」の属格「落とし主」を「が格」にして「主述述語文」の形態をとっている。二つ文はともに受影受動文のプロトタイプに由来する不都合なニュアンスが伴っている。このような使用例の存在は、日本語において題述文としての受動文は構文形態の多様化が進んでいるとともに意味関係の多様化も進んでいることを意味している。それも日本語の受動文は中国語の被構文より幅広く使用される一因と考えられる。

主要参考文献

- 松下大三郎（1930）『標準日本口語法』白帝社（1961年印刷）
鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房

- 鈴木康之 (1977) 『日本語文法の基礎』三省堂
- 朱 德熙 (1982) 《语法讲义》商务印书馆
- 益岡隆志 (1982) 「日本語受動文の意味分析」『言語研究』第82号, 日本言語学会, p. 48-64.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 益岡隆志 (2013) 『日本語構文意味論』くろしお出版
- 李 珊 (1994) 《现代汉语被字句研究》北京大学出版社
- 柴谷方良 (1997) 「迷惑受身の意味論」, 『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房, p. 1-22.
- 柴谷方良 (1997) 「言語の機能と構造と類型」『言語研究』第112号, 日本言語学会, p. 1-31.
- 木村英樹 (1997) 〈漢語被動句の意義特徴及其結構上之反映〉 *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale*, 26, p. 21-35.
- 木村英樹 (2008) 「北京語授与動詞“給”の文法化—〈授与〉と〈結果〉と〈使役〉の意味的連携—」『ヴォイスの対照研究—東アジア諸語からの視点』くろしお出版, p. 91-107.
- 木村英樹、楊凱榮 (2008) 「授与と受動の構文ネットワーク—中国語授与動詞の文法化に関する方言比較文法試論」『ヴォイスの対照研究—東アジア諸語からの視点』くろしお出版, p. 65-91.
- 沈 家煊 (2001) 〈語言的“主觀性”和“主觀化”〉《外語教學與研究》第4期, p. 268-275.
- 沈 家煊 (2006) 〈“王冕死了父親”的生成方式〉《中國語文》第4期, p. 291-300.
- 張 伯江 (2001) 〈被字句和把字句的對稱與不對稱〉《中國語文》第6期, p. 519-524.
- 杉村博文 (2004) 「中國語の受動概念」, 筑波大學現代言語學研究會編《次世代の言語研究Ⅲ》, p. 29-44.
- 高見健一 (2011) 『受身と使役—その意味規則を探る』開拓社
- 王 亜新 (2011) 〈非賓格動詞結構在日漢語中的表現〉《日語研究》第8輯, 商務印書館, p. 42-60.

【Abstract】

Similarities and Differences in Japanese and
Chinese Passive Sentences

WANG Yaxin*

This paper analyzes the semantic and syntactic features of passive sentences in Japanese and Chinese. There are many types of passive sentence variations in both languages. Due to semantic and syntactic restrictions, the subject (topic) of passive sentence represents both of the patient as an acted role and the affectee as an affected role in Japanese, but mainly as the affectee in Chinese. This paper analyzes the similarities and differences in Japanese and Chinese passive sentences from the standpoint of contrastive linguistics.

Keywords : passive sentences, topic-comment sentence structures, verbal patients and affectees, contrastive analysis

受動文における「受影」と「受動」の分化は日本語と中国語に共通に見られる現象である。しかし、語彙及び構文形態上の制約から、日本語では「受影」と「受動」の両方が併用されているのに対して、中国語では意味上の制約から「受影」が主流である。本稿は、日本語の受影受動文と中国語の「被」構文を中心に構文的特徴と意味的特徴から両者の類似点と相違点を分析している。

キーワード：受動文、題述文の構造、受動、受影、日中対照

* A professor in the Faculty of Sociology, and a member of the Institute of Human Sciences at Toyo University